

# アルメニアンダンス パートI (文責: 柳谷)

【アルフレッド・リード 作曲 1973年1月10日 初演】  
(ハリー・ペギアンに献上)

生涯に4000曲ものアルメニア民謡を蒐集した功績で知られるゴミダス・ウラタベド (1869~1935) の研究者であるペギアン氏がリードに委嘱した。全4楽章で構成されていて、パートIには1楽章が含まれている。以下に、パートIの中に含まれているアルメニア民謡と曲中での構成について記す。

## ・ツラニー・ツア (杏の木)

「杏の木よ、失恋の悲しみを揺り動かさないうでくれ…」という歌詞がっている歌。伴奏を含め4つの声部が対位法的に絡み合い、シンフォニックな響きがする。主な主題は冒頭のトランペット等が奏するものと、サクソ・イングリッシュ・ホルンが奏するものである。その2つの主題のもつ空気の対称性が主人公の心の揺れを表しているようにも思える。オーボエによって次へと引き継がれていく。

## ・ガガヴィ・イェルク (ヤマウズラの歌)

Hrのシンハーシェンに合わせてクラリネットが素朴なヤマウズラの愛らしい旋律を奏する。フルート・サクソ等に引き継がれ、ホルネットが副主題を見せる。Tuttiになる2小節前からのコード進行はリードならでは、

## ・ホイ・ナザン・イム (おーい、僕のナザン)

恋人の名を讃える少年の歌。中央に長調の部分を持つ3部形式(A-B-A)で構成されている。原曲は6/8拍子だが、リードによって5/8拍子に変更された。トリア旋法とリディア旋法を交互に用いている。

## ・アラガス山

標高4095m, 頂上に万年雪をのせたアルメニアの最尖峰。ゆったりとした山のイメージを大きな3/4拍子にこめ、全曲中で全音調性的な音楽により、前後の音楽から際立つ。対位法的にメロディを混ぜることで、和声的な単調さが捕われる。

## ・ニャー・ニャー (行け、行け)

約200小節から成る長大な終結部。3度音程を成す2声部の細やかな動きにより、少女の笑い声を模倣する。「行け、行け」の明るい旋律と、金管の合の手が度々衝突し合い、何度もその流れを止めながらも、やがて熱狂的なクライマックスへ到達する。

## ☆アルフレド・リード

20世紀における吹奏楽界の巨匠。それまで確立されていなかった「Wind Orchestra」の原形を作り、世に多くの名作を残していた。日本では全日本吹奏楽コンクールの課題曲として、「音楽祭のプレリュード」、「シンフォニック・プレリュード」が取り上げられたことで有名となる。2005年、多くの人口に惜しまれながら、この世を去った。

このアルメニアダンスは、オーケストラ編曲されてN響+佼成で演奏されたものもあります。吹奏楽公式サイトで配信されているので、興味のある人は是非…。